

# おいでん・さんそんSHOW 10月号

2019.10.01発行



一般社団法人押井宮農組合の組合員たち。前列中央が、当センター長であり、同組合代表の鈴木辰吉。

特集「押井集落の新たなチャレンジ」  
『源流米ミネアサヒCSAプロジェクト』

**米の消費者と家族になれば  
ふるさとの持続は可能だ！**

旭あさひ

高齢化による担い手不足、獣害、耕作放棄地の拡大。山村地域の営農は厳しい状況に置かれています。「一体どうしたら良いのか」。日々頭を悩ませている方も多いのではないのでしょうか。

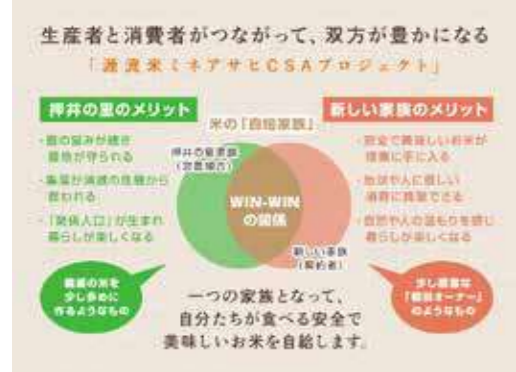
**集落消滅の危機を  
何としても防ぐ**

28世帯の住む旭地区の押井集落も同様の課題を抱えています。1950年代には200人だった人口は、2019年8月時点で84人。集落内には縄文遺跡があり、3000年続いていた集落が、この50年で消滅の危機に瀕しています。

「ふるさと押井の里を次世代につなぐたい」。押井集落で生まれ育った（一社）押井宮農組合代表の鈴木辰吉が、おいでん・さんそんセンター長として得た知見を全て注ぎ込み、「源流米ミネアサヒCSA（※）プロジェクト」を立ち上げました。

「センター設立から6年。中間支援組織として、新しいつながりを作って課題を解決することに力を入れてきました。そこから着想を得たのがこのプロジェクトです」。

**「源流米ミネアサヒCSAプロジェクト」とは**  
米を作る生産者、買う消費者、顔を合わせることもなかつ



た人々が「自給家族」になり、支え合っているのがこのプロジェクトのポイントです。消費者は、1俵60キログラムあたり3万円の生産費を出して営農組合と契約を結び、「自給家族」になります。

契約期間は3年から最長10年まで。生産者は、草刈りをして何とか維持していた土地を田んぼとして再利用し、契約者の米を育てます。

契約者は、「自給家族」として、繁忙期ボランティア、BQや収穫祭などの交流イベントに参加することができ、押井集落の家族たちと山村の暮らしを楽しむことができます。

「契約金は、米の代金ではなく、業務受託料として受け取ります。まちに住む家族の田んぼを、代わりに世話してあげるといふようなイメージです」。

(※) CSA (Community Supported Agriculture) は日本では「地域支援型農業」とも呼ばれ、欧米を中心にここ20年ほどで急速に広まっている。

センター長の  
ミライのフツに  
向かって！

vol.59  
FEC自給圏

株式会社三河の山里「ミニニ  
ティパワー」MYパワー」の初の住  
民説明会が行われ、取組みに期待  
する住民らが熱い議論を交わし  
た。

2016年の電力自由化によ  
て可能となった電力会社で、昨年  
5月に設立されたおいでんエネ  
ルギー株式会社にて、市内2  
社目となる。MYパワーは、セン  
ターも推進してきた高齢者のケ  
アシステム「たすけあいプロジェ  
クト」の実装化を中心に、山村地  
域の課題解決を図りながら、小地  
域ごとの再生可能エネルギー利  
用の発電所整備をサポートし、電  
力の自給をも見据えている。

経済評論家・内橋克人が「F  
EC自給圏」を提唱されたのは、  
東日本大震災・原発事故の直後  
であった。大いに共感し、センター設  
立のバックボーンにもなっている。



センター長  
鈴木辰吉

FEC自給圏とは、食糧  
(Food)とエネルギー(Energy)そ  
してケア(Care)医療・介護福祉  
をできるだけ地域内で自給する  
ことが、持続可能な社会の実現に  
つながるといふ提言である。弱肉  
強食の市場原理至上主義に警鐘  
を鳴らし、人と人とが共生する  
経済への転換を訴えたものだ。  
た。

MYパワーの立ち上がりによ  
り、この実現がにわか現実味を  
帯びてきた。国連本部で開かれた  
「気候行動サミット」でのスウェー  
デンの少女トウンベリさんの「怒  
りの演説」は、私たち大人の胸に  
突き刺さるものだった。今の社会  
や経済のありようを変えない限  
り、地球や人類のミライに展望は  
ないのである。

センターは、都市と山村エリア  
を分かち合う新電力会社2社と、  
持続可能な社会の実現に向けて  
しっかりと連携していこうと思っ

た人々が「自給家族」になり、支え合っているのがこのプロジェクトのポイントです。消費者は、1俵60キログラムあたり3万円の生産費を出して営農組合と契約を結び、「自給家族」になります。

契約期間は3年から最長10年まで。生産者は、草刈りをして何とか維持していた土地を田んぼとして再利用し、契約者の米を育てます。

契約者は、「自給家族」として、繁忙期ボランティア、BQや収穫祭などの交流イベントに参加することができ、押井集落の家族たちと山村の暮らしを楽しむことができます。

「契約金は、米の代金ではなく、業務受託料として受け取ります。まちに住む家族の田んぼを、代わりに世話してあげるといふようなイメージです」。

## イベント情報

### 【参加無料】【募集中】わたしとお家の明るいミライ

「いつかは考えよう…」と思っている自分とわが家の将来。そんなあなたの“ヒント”になる映画上映会と講座に、参加してみませんか？

#### 映画上映

##### ◆エンディングノート

- 日時/場所 | 2019年10月26日(土) 14:00~16:00 (13:30開場) /小原交流館ホール(豊田市永太郎町落681-1)
- 映画 | 「エンディングノート」(製作:2011年時間90分)
- 定員 | 100名(申込先着順)

●内容 | 熱血営業マンとして駆け抜けたサラリーマンが、定年後ガン宣告を受けるも、真正面から向き合い、最期の日まで生き抜く姿を実娘の目線で追うドキュメンタリー。

##### ◆ほけますから、よろしくお祈いします。

- 日時/場所 | 2019年10月27日(日) 14:00~16:00 (13:30開場) /百年草ささゆりの間(豊田市足助町東貝戸10)
- 映画 | 「ほけますから、よろしくお祈いします。」(製作:2018年時間102分) ●定員 | 80名(申込先着順)

●内容 | 認知症の患者を抱えた家族の日々を、娘である「私」の視点から丹念に描き、どの家族にも起こりうる普遍的な問題としてとらえたドキュメンタリー。

#### 講座

##### ◆「長く暮らせる家と自分の健康づくり」講師:久保田好正(株)新新社代表

- 日時/場所 | ①2019年11月10日(日) 10:00~12:00 (9:30開場) /百年草ささゆりの間(豊田市足助町東貝戸10) ②14:00~16:00 (13:30開場) /小原交流館研修室1・2(豊田市永太郎町落681-1)
- 定員 | 定員各50名(申込先着順)

●内容 | 福祉と建築の2つの視点から、健康づくりと家について、ワークショップと座学を交え、学びます。講座終了後「空き家相談会」を実施。

##### ◆「人生100年時代の片付け術」講師:渡部重矢(一社)実家片付け整理協会

- 日時/場所 | 2019年12月8日(日) 10:00~12:00 (9:30開場) /百年草ささゆりの間(豊田市足助町東貝戸10)
- 定員 | 定員50名(申込先着順)
- 内容 | 歳を重ねても安心して暮らせる、人生をよりよくする整理法を学ぶ。講座終了後、「空き家相談会」を実施。

※山村地域等(空き家情報バンク対象地域)に家を所有し、『わたしとお家の明るいミライ宣言』シートに署名、提出していただいた講座参加者には、関連の書類がはさみこめる木製のオリジナルファイルを差し上げます。

#### 申込方法

先着順で受け付けます。希望の映画または講座、お名前、ふりがな、ご住所、電話番号、同伴者人数、合計参加人数を明記の上、①ファックス(fax0565-62-0614) ②電話(tel0565-62-0610) ③メール(info-sanson@city.toyota.aichi.jp) ④事務所に持参(足助支所2階)のいずれかで、おいでん・さんそんセンター宛にお申込みください。

REPORT

## 拠点施設「結の家工房」お披露目会

足助  
あすけ

足助・萩野自治区で地域課題の解決に取り組む「萩野NPO結の家」が開催

8月24日(土)、足助・萩野自治区において移住定住をはじめとした地域の課題解決に取り組む「萩野NPO結(ゆい)の家」が、拠点施設「結の家工房」のお披露目会を開催しました。

結の家工房は川面町長門淵にあり、元集会所で倉庫として使われていた物件を同NPOが借り受け、この日に向けて計画作りや改修を進めてきました。

萩野NPO結の家は、移住者受入れに必要な「空き家」「空き地」の発掘や、山仕事・農業体験を通じた仲間づくりを実践的に行うことで、萩野自治区を下支えしていく組織を目指し、今年の3月に設立されました。その活動の一環として、移住を考えている家族との交流、大工仕事を体験する講座「トンカン木工塾」を結の家工房を会場に行ってきました。



NPO結の代表が挨拶 入口側の様子

足助川の清流に抱かれるようにして建つ「結の家工房」は、ピロティ構造で、地上階は大広間として、地下空間は川を眺められるウッドテラスになっています。階段を通じて川辺まで降り立つことができ、絶好のロケーションです。テラスは、地元の大工と建築士の指導を受けながらトンカン木工塾の受講生が施工しました。床には、地元の「三角山」で森林ボランティアらが伐り出したヒノキ材が貼られていて、木の温もりも感じられる心地よい空間です。

この取組を通じて移住を決めたご家族の参加もあり、終始和やかに開催されました。今回のお披露目はまだ「途中風景」で、今後も拠点づくりは行われていく予定です。次々と新しい活動が生まれる萩野地域から目が離せません。(坂部友隆)

REPORT

## 子育て耕縁会「大人のための合唱講座」を開催

足助  
あすけ

山村地域在住の「Duo le lian」が講師

9月18日(水)、子育て耕縁会「大人のための合唱講座『音とことばの楽しさを共に響きあおう』」が、足助社会福祉協議会まめだ館にて開催され、14名が参加しました。

講師は足助地区在住のソプラノ歌手竹内支保子さん。伴奏者は旭地区在住の山岡恵さん。お二人は「Duo le lian(デュオルリアン)」として活動されています。たくさんの方に依頼されて出演されていて、人気ぶりがうかがえます。

まずは、皆をほぐすため、お二人がピアノを連弾して音楽クイズから始まりました。その日渡された楽譜は『わたしと小鳥とすずと』(金子みすゞ作詞/若狭雅弥作曲)『いのちの歌』(Miyabi作詞/とみさわゆたか富澤裕作曲)の2曲。歌う準備として、身体のストレッチや呼吸法、姿勢などを確認し、パートに分かれて音取りを始めました。先導してくれる竹内さんの歌声が素敵で、どんどんいい気分になっていきま



講師の竹内さんを囲んで、練習する様子

す。練習を重ね、最後はみんなで2曲を歌うことができました。これまで、子育て耕縁会の内容の中心は「こども」でした。でも合唱講座は「自分」。

子育て中は毎日が目まぐるしく、息をすることも忘れてしまうような日々です。特に子どもが小さいと自分のことは後回しになり、リラックスした状態が分からなくなってしまいます。歌声を出すために息を吐き大きく吸いを繰り返し、「全身の酸素が入れ替わったみたいで清々しい」という感想もありました。歌い終わりは身体中が温まり、皆さん良い顔をされていました。

その後、輪になり感想をシェアすると、今まで知っていた人の中にも、かつて合唱部だったリコーラスをされていた人が案外たくさんいることに驚きました。「合唱」というキーワードに引き寄せられてきた新たな参加者もあり、好きなことを中心とした新たなつながりも感じられました。合唱は一人ではできません。子育て中の人々が参加しやすくと考えると、子育て人口の少ない山村地域ではなかなか難しい。今回、講師のお二人が足助・旭在住だったこともあり素早く実現したプログラムでした。わざわざ遠くに出でいかずとも、地域でいろいろな自分を取り戻す時間が持てる、ということはとても意義のあることではないでしょうか。



集落にある農家民宿ちんちゃん亭が企画している「こめっこクラブ」にはまちから大勢が参加している

### 集落営農組織 押井営農組合のチャレンジ

現状	10年後	将来
機械共同型集落営農 経営耕地 7.6ha(水稲5.0ha) 作業受託 10.0ha(周辺5.0ha) 年間売上 800万円 遊休農地 保全管理(2.6ha)		機械共同型集落営農 経営耕地 7.6ha(水稲2.5ha) 作業受託 7.5ha(周辺5.0ha) 年間売上 600万円 遊休農地 保全管理(5.1ha)

破綻

#### 源流米ミネアサヒCSAプロジェクト

Community Supported Agriculture

- 一般社団法人設立
- 農地集約化: 「地域まるっと中間管理方式」による安心して確実な集約
- 米の自給家族: 「つながり消費」を指向する100家族と長期栽培契約
- 機械設備拡充: ライスセンター、保冷庫など自給家族に必要な設備拡充



プロジェクトが前に進むためには「地域が家族のように信頼しあうことが」欠かせない

クラウドファンディング実施中!

消滅の危機にある「押井の里」を守りたい! 幻の米 ミネアサヒCSA プロジェクト

立ち上げの想い 自給家族について 詳しくわかる 押井の里 ホームページ



**自給家族として喜びもリスクも分かち合う**

生産者にとっては、田んぼを始める時点で契約金が手元にあることが、安心して米作りできることにつながる。安全で美味しい米を安定して食べたい契約者は、家族として押井集落で自給するための田んぼを得ることになります。

「両方にメリットがある仕組みです。ただし天候に左右されるので、豊作の喜びと同様、不作のリスクも分かち合うことになります。」

そうはいっても、リスクを覚悟してまで、自給家族になりた消費者がいるのでしょうか。

そんな問いにセンター長は、「押井集落では、5年前から農家民宿が営業をしています。有名な観光地があるわけではないのに、たくさんの人々がまちからここを目指して訪れます。その中には、すでに田植えイベントなどに参加し、米を買ってくれ人がいます。自給の喜び、安全でおいしい米を求める人はいるのだと実感しました」と笑顔を見せます。

**まずは30家族を募集**

プロジェクトをより多くの人からクラウドファンディング(※)を開始しています。支援金の返礼品として「源流米ミネアサヒ」を渡し、まずは美味しさを味わってもらい、自給家族になるかどうか決めてもらいたいと思っています。

「押井の田んぼ6ヘクタールを守るため、2024年までに自給家族を100家族に増やすことが目標です。今年、第1回として30家族を募っていきます。継続的に交流することで、ゆくゆくは、自給家族のなから、これから増える空き家に移り住み、ここを本物のふるさとにする人が出てくるといういなあと思っています。」

**まずは、地域が家族になる**

なぜ押井集落でこのプロジェクトをスタートすることができ

たのか。きっかけは昨年12月のことでした。

長年使用してきたライスセンターが老朽化し、押井集落営農組織は新設を検討することに。しかし、多額の投資をしても、現状のままでは回収できる見込みがない。それでも、組合員が出した答えは「新たなライスセンターを作り、田んぼを続けていく」でした。

「じゃあどうするのかと、知恵を絞って出てきたのが今回のプロジェクトです。平成23年、押井営農組合は、集落営農組織に改組し、個人でやれなくなった田んぼを組合で管理してきました。それから徐々に、集落の住民が信頼しあう家族のような関係になってきました。集落の住民みんなが賛同して、ふるさとを

守るためのプロジェクトを進めることができるのは、その関係性があってこそです。」

地域住民同士、都市と山村、生産者と消費者。それぞれのつながりの力で、ふるさとを守る試みが走り出しました。

「おいでん・さんそんセンターで、つながりの力が発揮される場面を何度も見てきたことが今回のプロジェクトの原動力になっています。同じ課題を抱える地域の皆さんに、プロジェクトを成功させることで、山村の持続化はやればできる姿を見ていただけるよう尽力したいと思います」(文・木浦幸加)

(※) 目的、志などのため不特定多数の人からネットサービスを通じて資金を集める行為